



日記「少数意見」



— 7 政治編 —

JUN

2002年1月26日(土) 女の涙

田中真紀子さんの涙が話題になっている。小泉首相は「涙は女性の最大の武器だっていうからね。泣かれるともう男は太刀打ちできないでしょう」と言ったそうなの。

昔私はある女性にラブレターのような手紙を書いたことがある。その女性の関心を惹こうと苦心して書いた手紙の最後に、「これから先君はいろいろな困難に出会うかもしれませんが、僕は必ず君を助けてあげます」と記した。彼女は手紙を読んで、「感動して泣いてしまいました」と言い、さらに「私を泣かせてしまったのだから責任をとってくださいね」と言いニコット笑った。そう、涙は責任を生じさせるのだ。

契約は申し込みと承諾が合致すると成立し、「助けてあげます」という申し込みに「お願いします」という返事があれば契約はできるように見える。しかし、どこの国の法律でもこれだけでは拘束力のある契約ができたとは言えないだろう。でも、これに涙が加わると話は違ってくる。法律上はともかく、男と女のルールブックによれば女の涙によって男の言葉は縛られ撤回できなくなり責任が生じる。美女（なぜかここは美女でないとサマにならないのだ）を感動させて泣かせると、男は中世ヨーロッパの騎士よろしく剣をとって姫を守るためドラゴンとも戦わなければならないのだ。

この場合の女の涙には、英米法に言う捺印（seal）と同じような効果があるように思う。伝統的法理によれば英米法では契約が成立するためには約因（consideration）があるか捺印証書（deed）によるかしなければならない。前者は上記の話でいえば女性が助けてもらう対価として100万円払ったとしたら契約が成立するということである。後者はこのような対価がなくても捺印を押す（というか付着するというか）ことによって契約を成立させることができる。

真紀子さんの話に戻るが、彼女の涙は違う目的で使われている。真紀子さんの敵はその主張をバックアップするものとして複数の証人と会議の議事録が出せる。それに対して真紀子さんは自分が聞いたことを自ら証言するしかない。これが裁判だったら勝ち目はないだろう。そこで彼女は自分の証言を補強するために涙を使うことにした。主張の真実性を担保するものとして（別な言葉で言えば自分が真実を述べているということを相手に信じてもらえる方法として）、男の世界には武士の切腹とヤクザの指詰めがある。女の涙には同様な効果がある（もっとも男との関係でしか使えないが）。このあと敵側がさらに証拠を出せと詰め寄ったら、男らしくない（女々しい？）という批判をうけるだろう。真紀子さんに対しても政治の場で女の武器を使うのは良くないという批判はあるだろうが、政治家である前に女である、と言ってしまえばそれまでだ。加藤紘一の涙は彼の政治家としての弱さを示してマイナスだったが、真紀子さんの涙は彼女のした

たかさを印象づけマイナスにはならない。でもしばらくはやめたほうがいいが。

2002年1月29日(火) 真紀子さん

今日のスポーツ紙の一面に真紀子さんの怖い顔が載っている。

普通こんな状態になると男の世界では（政治家の世界でなくても）政治決着が図られる。でも真紀子さんは女だからそうはいかない。「わたしはどうなってもいいから、あんたを滅ぼしてやる」というのが本音だから難しい。この場合の敵が、鈴木宗男などという小物ではなく、外務官僚、福田官房長官、さらには小泉首相を含めた男の世界そのものだから怖い。男の一人としては・・・女にとっては小気味いいのだろうが。

ちなみに昔狭いエレベーターの中で真紀子さんと一緒になったことがある。彼女が大臣になる前で、私は赤坂の月世界ビルの5階にあるエスカイヤクラブに行こうとしていた。彼女は同じビルの4階の海鮮料理に行くために長身の若い男（秘書か）と一緒にエレベーターに乗ってきた。そのときの会話。

「ご飯食べてきたら？」

「いいです。大丈夫です。」

「本当？お腹すいちゃうでしょうー。」

このときの真紀子さんはやさしそうだった。

2002年1月31日(木) 政治

真紀子さんは一番いい場面で首になった。大臣になってから初めていい仕事をした時だったから。これが例の指輪事件の時だったらただのワガママな女で終わっていただろう。

今回の事件は「言った」、「言わない」の問題にすり替えられているが、勿論本当に問題なのは鈴木宗男の外務省の決定に対する関与だ。私は政治がらみの案件はほとんど扱ったことがないが、その例外をひとつ。

もう10年以上前になるが、私はあるアメリカの食品会社の仕事をしていて、その会社が再販価格維持という独禁法違反の取引をして公取の捜査が入った。違法行為があったのは明らかで、どのような処分になるかが問題となった。私のいた法律事務所は独禁法の専門家の意見も聞いて、公取は勧告を出すだろうとアドバイスした。これは過去の例から見ると避けられないことだった。勧告というのは、違法行為が認定されたときになされる処分、アメリカの会社は日本はとも

かく他の国々での商売に悪影響があるので、勧告は絶対に困ると言った。我々は出来る限りのことはしたので後は公取の判断を待つしかないと言った。

その会社は、アメリカの日系人弁護士を使っていて、その弁護士は政治がらみの事件が得意な大物だった。彼の指示で我々は赤坂にある代議士の事務所に行った。その代議士は将来の首相と目された人で、公取に影響力があるとのことだった。事務所に行くと代議士の秘書と称する人物がいて、代議士は公取の委員長と親しい関係だから任せろと言った。彼はせっかちな男でこちらの説明を半分も聞かないで、「分かった、分かった」と言い、電話をかけた。相手は公取の委員長のようで、親しそうに話していた。電話が終わると、その秘書は、「私の言うとおりにすれば問題は無い」と言った。

しばらくして、公取の処分があった。怖れていた勧告ではなく警告だった。警告は違法行為の十分な証拠がなかったときになされる処分で我々の依頼者にとって満足のいくものだった。我々は、なぜこのような結果になったのか分からず当惑した。公取という役所は裁判所のような機能をもつ準司法機関なので政治家の力が及ぶのは意外だった。

さて、これを読んで何かが抜けているのではないか、と思う方がおられよう。そう、金。残念ながらと言うか、それはわからない。常識でいえば、あったでしょう。とにかく、法律家というのは無力だな、と感じた一件だった。

2002年11月27日(水) 北朝鮮の細菌兵器（近未来政治小説）

2003年X月5日 日朝国交正常化交渉は遅々として進まず、国民の関心は大銀行の国有化に移っていた。新潟の港町Aで奇病が発生したのはそんなときだった。最初はインフルエンザのような症状だが、やがて嘔吐や下痢が激しくなり、最後は身体の穴という穴から血液や体液が流れ出して死に至る。

2003年X月7日 最初の死者が出た。国立感染症研究所はエボラ出血熱の可能性があると考え、CDC（米国疾病センター）に検体を送って検査を依頼した。

2003年X月10日 CDCからDNA解析の結果が報告された。その正体はエボラ出血熱ウィルスとインフルエンザウィルスを合体させたキメラであった。死亡率50-90%のエボラ出血熱に遺伝子操作でインフルエンザの空気感染する能力を付加した細菌兵器だった。A町は自衛隊によって包囲され、町に入ることが出来るのは宇宙服のような防護服を着た者に限られた。

2003年X月11日 政府首脳、内閣調査室、それに自衛隊と民間の感染症の専門家を交えた会議が開かれた。そこで発病の1週間ほど前にA町の上空を大型の模型飛行機が旋回し海の方に去っていったこと、偵察衛星の写真から北朝鮮のものと思われる潜水艦がちょうどその頃A町の沖合いにいたこと等が報告された。エボラウィルスについては、まだ治療薬やワクチンは開発されておらず、開発には少なくとも年単位の時間が必要との専門家の意見が述べられた。

2003年X月12日 A町の人口の8割が発病し、その7割が死亡した。東京と大阪でも患者が確認された。

2003年X月14日 諸外国は日本発の航空機の着陸を拒否した。東京と大阪から大量の難民が地方に流れ出し、その結果感染者は全国に散らばることになった。

2003年X月20日 全国患者数が一万人を超え、死者も三千人を超えた。CDCの予測では、2ヶ月後には患者は三千万人死者は一千万人とのことであった。最悪の場合日本の人口は1割になるという専門家もいた。北朝鮮の赤十字から援助の申し出があったのはこのような混乱の最中であった。北朝鮮は防衛目的で細菌兵器の研究を行っており、問題のウィルスに対するワクチンを300万人分無償で提供する用意があるとのことだった。

(続く)

2002年12月3日(火) 北朝鮮の細菌兵器 PART 2

2003年X月21日 日本政府はワクチンの効果を確認するため医師団を北朝鮮に派遣した。その結果を待たず、自衛隊機がワクチンの空輸のために平壤空港へ向かった。

2003年X月23日 日本政府はワクチンの受け入れを決定し、相応の対価を支払いたい旨北朝鮮に申し出た。北朝鮮は人道的な理由で行う供与なので対価は受け取れないと述べたが、平壤で行うワクチン引渡しのセレモニーに天皇の出席を要請した。

2003年X月25日 天皇訪朝については政府内部で激論がたたかわされた。そのような屈辱的な条件は呑めないという意見と日本存亡の危機であるのでやむをえないという意見に分かれ、強硬派は自衛隊を使ってワクチンを奪取することを主張した。

2003年X月26日 天皇は首相を皇居に呼び、自分は国民のためならどこへでも行くと述べ、聖断は下った。

(続く)

2002年12月5日(木) 北朝鮮の細菌兵器 PART 3

2003年X月30日 将軍は平壤空港で天皇と首相を出迎えた。空港から平壤市内への沿道は百万人の人で埋め尽された。車の隊列は万寿台にある故金日成主席の銅像の前で止まった。下車した一向は長い石段を銅像の下まで登った。

銅像の前に立った将軍と天皇と首相を数千の人々が固唾を呑んで見守った。将軍は天皇に言った。「この銅像の前で土下座して、秀吉以来の日本人の朝鮮人に対する罪をわびてください」

天皇はこれには答えず、銅像の彼方の雲の峰の先に日輪をさがすかのごとく目を向けた。そして、静かにひざをついた。

首相は天皇に駆け寄ろうとしたが、屈強な衛士に阻止された。

(続く)

2002年12月9日(月) 北朝鮮の細菌兵器 PART 4

2003年X月30日夜 将軍主催の晩餐会は終わりに近づいていた。

首相は時計を見た。そろそろワクチンの接種が主要都市で始まる時間だった。死者の数は10万を超えていた。ワクチンの効果があることを祈るしかない、と首相は思った。

将軍がほとんど食事に手をつけていない首相に酒をすすめながら話しかけた。

「君はどこで間違ったか分かっているよね。そう、あの5人を帰さなかったことだよ。君は国と国の約束を破ったのだよ。どうせ、犯罪者相手の約束と思ったのかもしれないが、あれは私と私の祖国を侮辱するものだよ。そう、あれが我々の民族の積年の怒りに火をつけたのだ。屈辱の歴史がどんなものか君には分からないだろう」

首相は目を閉じて考えていた。これまでの自分の判断については歴史が評価するだろう。ただ、自分には最後の仕事があり、それをいかに立派に果たすかが問題だ。今まで読んだり聞いたりした自刃の作法を思い出していた。これから国を再建していく日本人が恥ずかしくないものにな

くてはならない。

エピローグ

帰国から3日後、首相は立派に自決した。ワクチンは予想以上の効果があり、1ヶ月後には新たな患者の発生はなくなった。8ヶ月後北朝鮮の政権は崩壊し、将軍は処刑されたという。

(完)

2003年1月11日(土) 金正日の真意

新聞は北朝鮮のNPT脱退を瀬戸際外交だと言っている。本当にそうだろうか。金正日は国家の自殺を考えている可能性がある。

死期が迫っている病人が自殺を考えるのはむしろ普通のことだろう。経済的にも外交においても行き詰まった国家が、滅ぼされる前に自ら滅びようとするのは異常だろうか。前例がないというかもしれないが、宗教団体では人民寺院やブランチダヴィデアンの例がある。オウムもその変形だ。北朝鮮は近代国家というより巨大な新興宗教と見るべきであり、国家としては前例のない事態をひきおこす可能性がある。

単に自爆するだけならいいと思うかもしれないが、それはないだろう。金正日は歴史に自らの名前を残すことを考えるだろう。国家としては滅びても主体思想と朝鮮民族の誇りを世界に印象付ける方法をとるだろう。

金正日は映画監督だったという。韓国から映画監督を拉致したこともある。そこにヒントがある。

2003年1月14日(火) 金正日の真意 その2

映画監督は映像のことを「絵」と呼ぶようだが、映画を作る動機も絵を描きたいという人が多いのではないか。小説家やシナリオ作家から映画監督になった人は筋やセリフを重視するのもかもしれないが、画家であった人（例えば黒澤明）にとっては絵の連続が映画であるようだ。

金正日がどちらのタイプか分からないが、今の状況を自分が監督する最後の映画と考えている可

能性はある。

現実と虚構を混同する芸術家は多い。中には現実を変えるほどの意志と実行力を持った人もいて、三島由起夫はその代表選手だ。そのタイプの芸術家が2000万の国民に対する絶対的な権力を持ち、核兵器とミサイルを手にしたと考えてみよう。

(続く)

2003年1月16日(木) 金正日の真意 その3

芸術にとって「滅び」は重要なテーマだが、映像作家であれば「大都市の崩壊」は描きたい絵のひとつだろう。私の観た映画の中では、大都市の崩壊に異常な執着をみせる大友克洋の「アキラ」が印象に残る。

実写ではCGの活用によってこのようなシーンも描けるようになったが、まだ物足りない。いずれにしても、ニューヨークや東京のような大都市が崩壊するところは誰も見たことがなく、映画監督としては魅了される光景だろう。

金正日にはこの場面を演出する手段がある。自前の核兵器をまだ製造していなくても、旧ソ連から流出したものを持っている可能性はある。最近の強気な姿勢はそれなしには考えにくい。

金正日は偉大なる父金日成に対してインフェリオリティコンプレックスがある。父が築いた王国を荒廃させるしか能がなかった道楽息子としては、何か父が出来なかったことをしてから死にたいだろう。朝鮮半島で米軍と戦うことではない。それは父がすでにやっている。選択肢は限られている。米国が遠すぎるのであれば日本しかない。東京を火の海にすれば父も喜んでくれるのではないか。

楽しい想像ではないが、これが彼の妄想かもしれない。

2008年9月2日(火) 福田首相辞任

昨日の記者会見を見て面白かったのは、最後の質問に対する答え方だった。ある地方新聞の記者が「首相の退陣記者会見を聞いていても「ひとごと」のような印象がある」と言ったのに対して「「ひとごとのように」と言われたが、私は自分を客観的に見ることが出来る。あなたと

違う」と答えた。

福田はこの記者のことをそれほど知っていなかっただろうから、「あなたと違う」というのは根拠のない誹謗だろう。キレル福田の「面目躍如」たるものがある。

切れるのは、必ずしも政治家として失格ということではない。切れるということは、その人の行動を予測困難にし、読めなくする。合理的な行動を取らない人間は怖い。キムジョンエルが怖いのは、何をするか分からないからだ。これまでの独裁者にはそのような怖さが必ず伴っていた。

福田が党首討論で切れたのならまだ分からないことはない。戦術として評価できる場合もある。しかし、退陣の記者会見の最後で切れるのはあまりにもまずい。あの言葉で自分がどのように評価されるか福田は全く考えていなかった。他人が自分をどのように見るかを認識することがまさに客観的になることだから、福田は客観的なものの見方が出来ない自分を認めたことになる。

安倍にしる福田にしる、日本の政治家の軟弱なことは嘆かわしい。国家はもっと厳しい試練に耐えなければならない場合が多々あるので、このような人間が指導者であっては困る。

10年前のことだが当時のクリントン大統領がモニカ・ルウィンスキーとの「不適切な関係」で糾弾されていたときは、彼の強さに驚嘆した。立派な実績を上げている大統領が個人的な問題で弾劾裁判にかけられそれが全世界に報道された。家族との関係も破綻に瀕していた。その最中もアルカイダの攻撃等世界情勢は緊迫していた。クリントンはその間一度も切れることなく任務を全うして手を抜かなかった。それは今日高く評価されている。

日本の政治家にはなぜこのような危機耐性がないのだろうか。

2008年9月27日(土) 小泉元総理引退

権力者が病気でもないのに引退するのは珍しい。

権力の座は居心地がいいようで老害といわれても辞めないのが普通。その言い訳になるのが「まだやり残したことがある」という理由だ。でも、政治の世界で完全に目標を達成することなどありえない。仮にその意欲が本当だとしても、たいていの場合そのための能力がすでになくなっている。後進に道を譲った方がよほど世の中の為になる。

小泉の引退を、安倍や福田の「放り出し」と同じように捉えている向きがあるがそれは間違っ

いる。任期途中ではないし、やりかけの仕事あったわけでもない。

フランスの詩人アルチュール・ランボーは21才のときに文学を捨て放浪の旅に出て文学に戻ることは無かった。それを残念と思う人はいても無責任という人はいないだろう。

今朝のテレビで福島瑞穂が面白いことを言っていた。「小泉さんと私は主義も主張も違うけど評価するところはある。小泉さんは命がけで遊んでいたのだから、それは私たちも学ばなければならぬ」という感じのことを言っていた。自民党の連中の言葉よりよほど正鵠を得た評価だ。

「命がけで遊ぶ」というのは言いえて妙で、普通は一緒にならない異なった概念を小泉はその行動の中で融合していたのだろう。小泉劇場と人は言うが、それが単なる虚構だと感じられたらあれほどの興奮を巻き起こすことはなかつただろう。それは芝居であってもその中で本当に人が死ぬかもしれないという真剣な芝居だった。

小泉はあれが芝居であり現実がそれはほどヤワではないと十分知っていたのだろう。今日の改革路線に対する批判も反動も予測の範囲内だったのだろう。でもそれを言ってしまったら歴史は動かないから彼は言葉で小泉ワールドを作り出し動かないはずのものを動かした。それはたしかに命がけの遊びだった。

今彼は政治にはそれだけの情熱を傾けられないのだろう。ランボーが文学を捨てたのがなぜかは知らないが、文学に対する情熱が無くなればいい作品も出来ないだろうから新しく情熱の対象を探すのは自然なことだ。政治家だって情熱が無くなればいい仕事が出来なくなるだろうからそれが引退の理由で悪いわけではない。

政治に情熱をもっていないのに権力にしがみつくと多くの政治家は小泉を見習うべきだろう。

2009年1月27日(火) 内閣総理大臣朝青龍明德殿

麻生太郎が大相撲の千秋楽で朝青龍に内閣総理大臣賞を渡す際、「賞」を飛ばして読んだことが話題になっている。またか、という感じだが笑い事で済ませていいのだろうか。

麻生は「横綱は強くなっちゃ」と言って笑いながら総理大臣杯を渡したと報道されているが、あれは決して楽しい笑いではなかった。土俵に上がったときから動きがぎこちなく、ひきつったような笑いを浮かべていた。何をやっても笑いが取れないピエロの泣き笑いのようなようだった。

麻生もプレッシャーに押しつぶされかけている。

今DVDでアメリカのTVシリーズ、ザ・ホワイトハウス（原題は The West Wing)を観ている。この作品や「24」シリーズを観ると、アメリカ人が大統領の必要条件の第一に考えているのがストレスに強いこと、特に危機的な状況に対応できる能力だということが分かる。

アメリカ大統領は核のボタンを持っているので日本の総理大臣とは違うというかもしれないが、日本だっていつ大災害が起きるか、テロの対象になるか、北朝鮮のミサイルが飛んで来るか分からない。

そのときに迅速な判断と行動が取れる人が総理大臣でないと多くの人命が失われることになる。笑い事ではないのだ。

ジョージ・W・ブッシュ前アメリカ大統領はあまり評判がよくないが、イラクで靴を投げつけられた事件を見て、少なくとも日本の首相より危機対応能力はあると思った。安倍だったらもろに顔面で靴を受け止めただろうし、福田だったら、ブッシュのようにユーモアで返すことは出来ず、切れていただろう。

2009年2月20日(金) 中川財務相辞任

私がああの泥酔記者会見の映像を最初に見たのは、日曜日の17時半のニュースだった。そこでの解説は質問と大臣の回答に食い違うところがあったというあっさりしたものだった。しかし、見て分かるとおりのそんな生易しいものでなく、小淵元首相が倒れる前の記者会見を思い出したので他チャンネルで続報を探した。

結局当日は騒ぎにもならず、翌日の新聞にも、日経では3面に小さな囲み記事が載っただけだった。

騒ぎになってからワイドショーなどでは、あの時会見を取材していた記者が大臣の態度がおかしいことを質さなかったのは職務怠慢だとの糾弾があった。しかし、そこにいた記者や随行の連中だけでなく、テレビも新聞もこれが大問題だとは当初は思っていなかったのは明らかだ。大問題になったのは外国での報道が国内で取り上げられてからだ。

最近の報道では、中川大臣の酒にまつわる問題行動が多々あるとされ、曰くつきの人物であることが今になって明らかになった。当然マスコミはそれを知りながら、これまでと同様に看過したのだ。もしこの事件が国内で起きたとしたら大事件にはならず、中川の武勇伝に一つのエピソード

ドを付け加えるだけで終わっていただろう。

日本人は酒の上の行動に寛容だ。それは日本が民度の低い野蛮国だからという解釈はある。今回中川の辞任ということまで問題が大きくなったのは、日本人が外国から自分たちがそのように見られることを畏れたからだ。

でも、欧米の連中がそれほど大人で酒に対しても自制心が効くとは思えない。欧米の白人は酒に強いことが彼我の差となって表れる。これは遺伝子の違いだと医学的にも証明されている。

欧米の酒飲みはジンやウォッカをラッパ飲みするように、日本人のレベルを遙かに超えている。それほど飲まなければ酔っ払わない反面、身体や精神に対する影響も日本人の比ではなくなる。アル中は社会問題になり、禁酒法まで施行されるようになる。

日本人はそこまで行く前に酔いつぶれてしまうため、心身への損害は限定的になる。中川の場合も、有能な人物のようで、酒の上の不祥事によってその評価は減殺されていなかった。つまり、酒の上での言動は素面の人間評価に影響しないのだ。実際日本には酒にまつわる武勇伝を自慢する大物経済人や政治家は多い。それは、酒も飲めない四角四面の人間よりよほどプラスの評価になる。

このように、酒は日本の文化だ！と言って中川を擁護する人がいてもよかった。私は、個人的には、酔っ払いは嫌いだが（笑）